

## 狐憑症研究小史

— E・ベルツ、島村俊一、呉 秀三 —

岡田 靖雄

わが国の狐憑症研究において、陶山大祿の『人狐弁惑談』(一八二六)、エルヴィン・ベルツの「狐憑病説」(一八八五)および門脇真枝の『狐憑病新論』(一九〇二)である。江戸期には精神疾患を代表していたかの狐憑症は明治期にはいつてその数を激減させ、今ではごくまれとされる。だが、わたしは荒川区における精神科外来で狐憑症を呈した患者を一年間に二名みており、日本人の精神症状構成において狐憑症は今も一定の意義を有している。それだけに狐憑症研究史をさぐることは重要である。明治期にはおおく「狐憑病」の名が用いられたが、これはさまざまな精神疾患にみられる動物憑きものあるいは動物変形妄想の一つであるので、ここでは「狐憑症」の名を用いる。

狐憑症については、『図録日本医事文化史料集成』第四卷

(一九七八)中の「わが国の精神疾患史の点描」で概観し、また『呉秀三著作集』第一卷(医史学篇)にいられた「狐ニ関スル載籍ノ稽攷」への解説でいくつかの問題を指摘した。ここでは、新資料をもいれて、明治期における研究の跡をたどりたい。

一八七九年(明治二年)の『東京医事新誌』に土佐出身の江澤圭磨が犬神憑きの一例を投書してその説明をもとめたことに対し、大学医学部に在学中の小池正直が教師弁士の意見をもとめたところ、弁氏は犬神付きはヨーロッパ古史にいう悪魔憑きと「分寸之ト異ナルナ」「一樣ノ写真絵ノ如シ」といって、グリーンジンゲル氏精神病学書中の「怪憂狂」Daemone-Melancholieのところを紹介するよう小池に嘱した。二症例をふくむグリーンジンゲルの“Die Pathologie und Therapie der Psychischen Krankheiten”(一八六一年初版)からの、小池による紹介は同年の同誌にのっている。他地にも類似の病症のあることが、同誌上に つづいて投書された。一八八五年(明治一八年)一月二六日、二七日の『官報』の「学事」欄にのったベルツの「狐憑病説」の最初のきっかけとなったのは、江澤報告である

う。

もつとも本格的な、そして現場での狐憑症研究は、当時帝国大学医科大学助手・東京府巢鴨病院医員であった島村俊一が、一八九一年（明治二十四年）七月八日に東京をたち、同二三日から翌月二十九日まで島根県に滞在し九月二日に帰京するなかで、三四名を調査した結果をまとめた「島根県下狐憑病取調報告」で、これは『東京医学会雑誌』第六卷・第七巻にのつた。島村の報告例は人狐憑き二九、犬神憑き二、狸憑き一、野狐憑き二で、うち一五名はヒステリー狂と診断されている。ところで、憑きもの症についての最近の論文ではこの島村論文がほとんど無視されていることは奇怪で、わが国の精神医学の歪みの一端をしめしている。

榊<sup>さかき</sup>俣<sup>ま</sup>は一八九三年に“*Alopecanthropie*”（狐憑病）の名を提唱した。今回小川鼎三先生が閲覧をゆるされた呉秀三編の写本『奇談集』仮題は、狐憑症を呈した二症例との問答（臨床講義か）をのせているが、問診しているのは榊教授らしい。

門脇の『狐憑病新論』は、東京府巢鴨病院に入院した狐

憑症ある患者一三名についてまとめたものである。持ち筋とされる家が存在する地方に多発することがわが国の狐憑症の特徴であるが、門脇論文は患者の出身地や持ち筋との関係を述べていない点はなほ不備であるとはいえ、東京の精神科病院に入院した患者中にも狐憑症を呈する人がかなり多数あったことがわかる。

狐憑症に対する呉秀三先生の最初の関心をしめす「狐ニ関スル載籍ノ稽攷」は、主として葛舎主人の『靈獸雜記』によっている。同じ一八九六年（明治二十九年）に先生は『芸備医事』誌上に何号かにわたり、『タウビヤウ』及犬神ニ関スル見聞文書及各家ノ実験ノ寄贈ヲ冀望ス」の広告をのせている。これにこたえて尼子四郎ほかよせた一通の文書をわたしはもっており、その一つは前記「わが国の精神疾患史の点描」に紹介した。このまえ一八九四年に出された『呉氏精神病学集要』前編は、「証候通論」中の「妄想ノ種類」のところで、「狐憑証 *Alopecanthropie* (Sakaki)」につき二ページあまり記述している。一八九七年に先生は山口・広島・島根三県下で狐憑症につき調査したようであるが、確認はできていない。「日本ニ於ケル精神病学ノ歴

史」(一九〇三)は、片倉鶴陵によって狐憑症例の詳しい紹介をしている。そのほかいくつかのところで狐憑症にふれ、前記『奇談集』もほかにしておくの文献をあつめているが、実験した狐憑症例についての本格的論文を呉先生はかかれていない。

(荒川生協病院)

## 日本における包帯の 歴史に関する研究

(一) 「繃帯彙編」の原典

蒲原 宏

吉雄種満(一八三八—一八八二)の訳した「繃帯彙編」は明治七年三月に官許を得ながら、明治十二年九月十五日にようやく東京須原屋から出版している。

五冊(第一冊三五丁六図、第二冊二四丁六図、第三冊二七丁一四図、第四冊十八丁十二図第五冊図版)からなる。例言には「維新以降洋学ノ隆盛前時ニ超出スルハ天下ノ知ル所ナリ即チ醫學ノ如キ窮理分析解剖生理病理ヨリ内外諸科学ノ学日ニ講シ月ニ明ニ精妙皆至レリ、而シテ諸科ノ譯書モ亦多シ独リ繃帯ノ一科世ソノ書ニ乏ク其業ヲ講スルモ亦從テ便ナラス、予西洋一千八百六十九年刊行獨逸国一等軍醫ゴフレス氏著ス処「フルバンド、エンフルバンド、インストリユメント」ノ書ヲ讀ムコトヲ得タリ」とある。原著者のゴ